

日本における宋明思想研究の動向

はじめに

近年、宋から元、明にかけての思想史に関する研究書の刊行が目立ち、この方面の研究が活況を呈しているかのように見える。この趨勢には文部科学省による学位論文取得及びその出版の督促という学問的文脈以外の要素も加わっているのであって、かく言う筆者もその波に後押しされた一人であるが、研究の実質的な活性化に結びついているか否かは別に問われよう。遡って二〇〇一年前後、世紀の変わり目ということで各学会はそれまでの研究の概括や未来への展望を語るシンポジウムを相継いで開催し華やきをふりまいたが、筆者はその内容にしば

土田 健次郎

しば隔靴搔痒の感を禁じえなかった。その原因は、その多くが個々の研究者が従来から発表してきた自己の研究姿勢の再表白であって、それらが収斂、あるいは相互に啓発していく方向が見えないことであつた。筆者も現状を未来につなげる議論を即座に開陳できるわけではないが、この小稿を態勢を整えるよすがにしたい。そのためには問題のよって来たるところを明らかにするために適宜戦後の出発点まで話しを遡らせざるをえず、その結果問題点を相当しぼりこむことになった。また紙幅の関係もあるが、儒教を軸としたこと、主として単行本を中心に取り上げたこと、そのために評価すべき多くの個別的成果について言及できなかつたこと、題目に示したように日本の研究に限つたことを断つておきたい。^①

一、近代化論との関係

戦後に入ってから宋明思想史研究で世間的影響が強く話題性の高かったものとすれば、まず指を屈するのが島田虔次氏の『中国に於ける近代思惟の挫折』（筑摩書房、一九四九）、『朱子学と陽明学』（岩波書店、一九六七）であろうか。前者は明末の王学左派の李贄にヨーロッパ近代思惟の萌芽を見出し、そこに中国思想、特に陽明学の内発的可能性を見出すという大胆な議論である。後者は朱王の思想の明快な解説をしつつも、聖人可学論に宋代からの新儒学の特色を見出し、それをもとに「内と外の闘争史」として宋明思想史を捉えようとしている。

ところで前者に関して、数多い島田信者が本書の魅力を喋々しながらも、その李贄評価を継承する者が乏しいのが、本書の微妙な位置を象徴している。ただ本書が出現したことによって、それに対抗すべく構想された溝口雄三氏の『中国近代思想の屈折と展開』（東京大学出版会、一九八〇）をはじめとした一連の研究が世に出たとも言えるのであって、島田氏の仕事は戦後の研究者が常に意識する対象であったのは間違いない。⁽²⁾ それでも筆者がある種の違和感を感じるのは、本書は本来先鋭的な問

題提起の書であるはずであって、それが宋明研究史の中心におさまっているのは、いわば異端が正統の位置に入ってしまった居心地の悪さを感じるからである。⁽³⁾

そもそも宋明思想史研究の大きな問題は、正統的な研究が乏しかったことであった。戦前のものであり宋代が中心であるが、諸橋轍次氏の『儒学の目的と宋儒』（慶曆至慶元百六十年間）の活動』（大修館書店、一九二九）などは正統的な位置に入りうる規模と骨格を持っていたが、儒学の目的、分化、統整という流れの把握、正名、経論、修養という区分けが持つ漢学臭と、これらの区分けがなぜ思想的展開の鍵となりうるのかの一般論的説明の欠如のゆえに、その位置に入り得なかつた。ここにあって「一般論的」という語を使用したのは、島田氏の『中国における近代思惟の挫折』が、「一般論的考察」の章を持つことに象徴されるように、中国学の専門家の枠を超えた他領域の研究者を議論の渦に巻き込みそれによってまた学説が理論的に鍛えられていく可能性の有無が問題だからである。なお諸橋氏の業績は、道学以外の思想潮流も鳥瞰して思想史を描いたことであって、筆者も非力ながらも思想史はいかにして成立するかの方法論的問題を意識しつつそのような著述を試みたが、このよう⁽⁴⁾な試みは他にもっとなされるべきであろう。⁽⁵⁾

さて島田氏の関心はもとも明末にあり、その時代の思潮、特にいわゆる王学左派の可能性に中国思想自体の近代への可能性を見出しえた喜びが感じ取れる。島田氏の李贄観に対する反論の主流は、李贄における近代性の否定と、明初から清初の間を挫折と断絶的に捉えるのではなく連続性を見出す考えであって、特に溝口氏の理観の再生、自生的近代の議論は、挫折論ではなく連続的展開の中に中国独自の近代を見据えようというものであった。溝口氏は社会史の成果をはじめ小島毅氏の天観の変容の研究などを取り込みつつ、思想の担い手、社会との相関関係を軸に、島田氏の「内と外の闘争史」や荒木氏の「本来性―現実性」図式を乗り越えようとする思想史を構築してきた。しかし論争的性格が強いためにともすれば思想史としての独立性が薄い印象を受けるのも事実であって、氏がより完備した思想史を執筆することが待望される。このような思想史が複数書かれ検証の対象になることで、島田思想史が本来の場所を得られ、それが将来の研究の活況につながると筆者は思っている。

やはり問題なのは、中国的なものであれ西洋的なものであれ近代を終着駅にしてそこから遡行して近世を位置づけるという視点の可否と、近代化というものが内発的なものだけで考えうるかということである。後者に関

しては、日本の場合でもそうなのであるが、前近代の思潮がそのまま展開すれば近代が成立してくるというのではなく、西欧の近代思惟を受け入れる思想的土壌の有無が問題なのである。明末においてそれまでと別様の価値観を吸収しうる状況が出来たことと、その別様の価値観が中国思想の内発的展開で生み出されうるということとは別の話であろう。いわゆる「近代化」の指標とは、世界的な歴史の単線的な流れのどの段階に属するかという時間系列ではなく、各地における西欧近代思想の受容の程度という空間分布で考えることも可能であろう。

ちなみに中国の近代化論の場合は、以前は中国共産党政府をゴールとし、そこから遡源する議論が陰に陽に主流であって、それに対してその筋からはじき出された左派傍流、保守系思想家たちの評価によってこの路線を相対化しようという試みもあったが、現在は現政府の経済政策の資本主義志向から行き着くべき終着点が不透明になり、近代化論自体が下火の傾向がある。

また近代代から遡行する視点の問題に関連して言えば、筆者が最初に持った島田氏の宋代思想史研究に対する違和感は、明代思想から遡源した宋代思想史であったことである。それは氏が主観唯心論の系譜を描くところなどに端的に現れている。

そもそも宋明思想史は時代区分論との関係が深かった。以前は唐宋变革期をめぐる議論が中心であり、そのうちに、唐の中葉における国際的文化から漢民族中心主義的文化への内向化、宋の南渡以後の士大夫の地域志向の広がり、明の中期以降の商業活動の肯定化など、思想動向と連動する種々の結節点が指摘されるようになった。そこに元や清という異民族統治の問題というさらに重要な要素が加わるのであって、今後これらがどう整理されていくのか、興味深いところである。

二、思想分析・思想交渉

筆者は以前、拙著（注（4））において所謂宋学や明学がなぜ論争を展開し続けそれゆえに学説史として記述しやすいかを問題にし、そこに朱子学の社会的勢力の増大に伴う問題意識と表現手段の共有化を見た。かかる学説史を成立させる諸思想に、西欧思想に拮抗しうる哲学性を感じ取ることは自然であり、これらの「哲学的」分析も戦前からの歴史がある。その中で一家をなしたのは楠本正継氏^①で、それを個性的に継承したのは岡田武彦氏と荒木見悟氏である。岡田氏は陽明学の展開を従来の正統と異端の二分法ではなく王学三派で再把握した議論で知

られる^②。また体認の必要を説く姿勢は、研究者の粹を逸脱したものと思われかねない要素を持つが、そもそも宋学や明学を構成する諸概念は聖人を目ざす者にとって初めて十全に機能するのである。このような動きの中で意味を際立たせる概念体系を内と外から見据える方法論はまだ熟してはいない^③。

荒木氏は、宋学、明学のみならず仏教の華嚴や禅も視野に入れて、本来性と現実性という視点から宋明の思想動向をダイナミックに描き出し、この議論は吉田公平氏などに継承されている^④。荒木氏のこの座標の取り方は、確かにこの時期の儒教と仏教を対等に取り込み、また個々の思想を位置づけるうえで数々の成果を上げたが、同時に問題なのは、この座標軸が「悉皆成仏」、「聖人可学」といった万人が至高の存在になれるという前提を持つ思想についてのみ有効に機能することである。つまり万人の道徳的可能性と現実の悪の同時存在という難問に向かう場合、前者を軸にする立場と後者から出発する立場に自ずから分かれるのであって、その拮抗が種々の対立を生み出しているたのである。この前提を持たぬものまで範囲に入れてこの図式を適用しようとするならば、本来性と現実性は単に理想と現実というありふれた因子にすぎなくなり、座標軸の取り方としては平板なものに

なる。さらに問題なのは、この図式が思想分析というよりも思想効果の説明という性格を強く持つことであって、荒木氏の多岐にわたる豊かな成果を継承発展させるには、思想効果を生み出す思想構造の分析視角がどのように定められるのかを改めて模索する必要がある。

もともと「仏殿を立てず、唯だ法堂を構ふる者、……」（『禪苑清規』）とまで言う禪宗に対し、理論上から見ればどこが宗教なのか疑問を持たれてもおかしくはない。ただ証明以前の「悉皆成仏」に対する「信」を基盤にすることに於いて宗教性が成立しているとも言えるのであって、そのことは宋学や明学と同様である。島田虔次氏はしばしば馮友蘭の『新原人』（商務印書館、一九四三）に見える境界論に好意的な言及を重ねてきたが、それは「天地境界」という宗教に非ずして宗教的心境と拮抗する境地の設定が宋学や明学の性格解明に有効だと見なしたからである。ただこのような思想に対して普遍性を持たせた分析を行うのは決して容易ではない。

その中で、井筒俊彦氏の『意識と本質——精神的東洋を求めて』（岩波書店、一九八三）などの一連の著作は宋明研究の中堅・若手を刺激してきた。井筒氏は意識と本質の関係軸を立てることで、朱子学を他の諸思想、特に宗教との対比を試み、それによって朱子学の構造のみなら

ず、朱子学者の意識形態をも炙り出そうとした。この試みは、宗教的体験をも比較の範囲に取り込みえていくことで意義があり、単なる静態的学説対比を超えているが、朱子学では未発の状況を恒常化していくとする解釈には疑問が残り、また本質ということでも、朱子学は一貫して外物と内心の反応次元から離れないように意識しているのであって、かかる次元に原理性を見出す姿勢こそがその個性であり魅力であることを見逃してはならない。

筆者は現在でも出発点にすべきは安田二郎『中国近世思想研究』（弘文堂書房、一九四八）の研究であると思っている。安田氏のこの方面はかく言えるほどの整合性と明晰性を備えているのであって、哲学的モノローグの類とは一線を画している。原典に即し、しかもその分析が朱子学の隅々まで適応できる感触を、我々はもつと大事にしなければならないのではなからうか。

ちなみに気とともに朱子学を構成する重要概念である理の分析には食傷したという声も以前から聞かえているが、そのわりには相変わらず曖昧である。例えば理の属性として提示される「所以然之故」と「所当然之則」といえば、しばしば存在と当為という形で捉えられてきたが、存在から当為が導き出されるという一般的順序ではなく、むしろ当為として迫ってくるものが確かな存在な

のである。そもそも朱子学では講学という集団学習を通して共有される知と、自己の内部で悟得される知を言い、それは多様に分析されてきたが、前者は単なる理性的な知の範囲内に限定されず、主観の共有も含み込まれていることに注意せねばならない。分析視角が欧米からの借り物である場合、その視角が組み込まれているものと体系の各部所が解釈の中に混入してくる。今必要なのは原典から出発して、それぞれの思想の文脈、骨格を明らかにすることであり、それによって見えるものは近年の研究者のものよりも奥行きがありしかも明晰なものであると思っている。

ところで仏教や道教との関係で言えば、以前から儒教史、仏教史、道教史の枠組を前提にした所謂三教交渉史の文脈の研究はなされてきた。¹⁹しかし宋以後の儒教史で仏教や道教を視野に入れねばならないのは、宋以後の儒教が仏教、道教を自己内部へ巻き込みながら展開していったからで、前引の荒木氏の一連の研究は宋明儒学と仏教の根本的連関と差異を知るうえで逃せない成果であった。また禅宗と朱子学の関係では柳田聖山氏の諸論文²⁰、道教との関係では三浦國雄『朱子と氣と身体』(平凡社、一九九七)が、豊富な文献的調査をもとにし、単なる相互類似による引き当ての域を脱している。特に

三浦氏の文明論的な陰翳をつけた諸論文は多くの知的なスリルを味あわせてくれた。この方面では、吾妻重二、馬淵昌也氏などがそれぞれの領域で筆を染めているが、その中で三浦秀一氏の『中国心理学の稜線——元朝の知識人と儒道仏三教』(研文出版、二〇〇三)は個別研究に終わらせず思想的に組み上げた意欲的な試みである。この力作を読んで思ったのは、道学で煮詰められた議論が道教や仏教と相互乗り入れることで問題意識の共有が広がるが、それゆえに議論が薄まることがあるということであった。つまり思想の濃度はただ単線的に徐々に高くなっていくのではなく、外からの水で薄められたり、また煮詰まったりという複雑な動きをするということがあって、この種々のゆれを丹念におさえてこそ中国思想史の諸相のより十全な把握は可能となるということかもしれない。

三、文献研究

さて朱子学の共同研究の成果として歴史に残るのは一九七〇年から一九七六年にわたって開かれた京都大学人文科学研究所における田中謙二氏主宰のものである。この研究会の特徴は、語学、文学、史学、哲学、宗教、

科学史などの分野で当時第一線で活躍していた顔ぶれが集ったこと、特に語学研究の成果を生かして『朱子語類』の解説の水準を一気にあげたことであろう。現在田中氏の研究や、禪籍における入矢義高氏の口語研究の成果を活用することは常識になっている。なお東京でも溝口雄三氏を中心とする宋明研究会が『朱子語類』の訳注を『汲古』（汲古書院刊）に連載中であり、近々それをまとめた単行本が刊行予定とのことである。

そして田中謙二氏の『朱門弟子師事年攷』（もと『東洋学報 京都』四四、四八、一九七三、一九七五に掲載、大幅な増補改訂版は『田中謙二著作集』三、汲古書院、二〇〇一）こそは人文科学研究所の成果の最たる例であって、この朱熹の門人の師事時期の調査の登場により、門人たちの記録である各語録の年代設定の幅が格段にせばまり、朱熹の思想形成過程の研究環境は一気に充実を見た。ただそれでも金文京氏が前掲著作集の解題で朱子学研究者の怠慢を暗に鳴らしているような状況はある。その中で市来津由彦氏の『朱熹門人集団形成の研究』（創文社、二〇〇二）は朱熹の講学の実態を原資料を駆使して明らかにしようとした。本書は事実関係の指摘のみならず思想分析をもあわせて組み込、朱熹がいかなる人々に学を教え道を伝えようとしたのか、またその過程で彼自身がいかなる影

響を被っていたのかを立体的に描いている。

資料的問題で言えば、近年の古代の出土資料の発見が思想史の常識を二転三転させているほどではないにしろ、宋明儒学における資料研究の可能性はまだ残っている。例えば陽明学関係では、山下龍二、吉田公平、水野実、永富青地の各氏が新資料の紹介につとめ、特に水野氏は王守仁（陽明）の資料の翻刻、訳注を推進し、研究者に多大の便宜をあたえている。

四、社会史・文化史との関係

近年の動向として特筆すべきは、近年の社会史、文化史との連携的研究である。特にアメリカにおける地域研究の影響が濃厚になり、その視点と成果を思想史に組み込む研究が日本でも現れ始め、同時にアメリカの史学界の北宋の中央志向が南宋になって地域志向に転移していくという見方が日本の研究者にも流布していった。地名を冠する学派区分は無かったわけではないが、今度の動きは思想を担う士大夫たちの家族、交友、師弟関係や社会的経済的背景を視野に入れて、各思想の個性がそれらの社会的文化的基盤とどう連動しているのかを具体的に調査したうえで構造的に明らかにしていくものである。

中には個別的な人的ネットワークの調査結果を通念化された思想的個性と性急に引き当てるものもあるが、士大夫の営為の全体像と称してアナール学派などを模倣してあれこれの研究成果のパッチワークを作ったり、表層的な目配りのよさを見せる底よりは、思想史と社会史を平等に連結させる糸口を作ったと言えよう。ただそれでも地域志向を思想の地域化にのみ短絡させる傾向には問題がある。士大夫がその知識人性を表明する対象には、在地の士民と全国の士大夫との両方があり、それによって強調点に差が生ずることはあるが、自分の言説の普遍性を誇示することには変わりはない。地域を超えた思想表現手段を利用するのはこの場であつて、朱子学の問題領域と思想言語がここで機能する。朱子学に賛否いずれであつても、この場があるからこそ自己の立場の表明に普遍性が付与でき、在地において知識人としての活動が可能になるのである。筆者はこの方面の朱子学の機能を強調してきた(注(4)の拙著)。これには、もし地域志向増大の中でそれを単純に反映したのが朱子学であるのならば、なぜ朱子学が中国をこえ、朝鮮、日本にまで流布していったのか、また宋以後における出版を含めたメディアの発達と文化史をからませるのは近年の流行であるが、かくも情報の共有化が進んだことと地域化との関係をど

のように説明できるのか、という素朴な疑問が関係している。²⁴⁾

社会史などの領域と思想史を総合化する試みの中で、近年注目されたものとしては、礼の研究がある。以前は宋以前の儒教について、哲学性の薄さを言う分、訓詁とともに礼の重視を特徴として取り上げていたが、近年小島毅氏の『中国近世における礼の言説』(東京大学出版会、一九九六)などの精力的な仕事により、この方面に新たな光があてられた。²⁵⁾

礼の研究は多方面への展開をもたらした。明以後、礼の重視がひととき顕著になるという指摘は、郷村秩序の維持に対する儒教の貢献という議論にも展開していった。²⁶⁾

従来宋代の礼については、宋以後における大家族、宗族重視の傾向が言われ、²⁷⁾ また経学史的文脈で王安石の『周礼』重視、道学の『儀礼』重視という対立図式があげられるなどしてきたが、近年これらの事柄が新たな問題意識の中で再考されてきた。例えば『周礼』の官僚制度と『儀礼』の個人儀礼という性格から、道学における個人儀礼の意味の深化が新たな問題として浮上してきた。そこで注目されるのが礼と修養の問題である。朱子学の敬が「主一無適」のみならず「整齐嚴肅」を以て説明されるように、道学において礼は自己に内在する秩序性を

確実な形で顕在化させる最大の手段であった。陽明学のように内面からわき起こる道徳的情動に身をゆだねるのに対して、外的規制によって心身の規律化を図る朱子学が礼についての姿勢を異にするのは言うまでもない。朱子学と陽明学の拮抗の場で、礼の問題がしばしば出てくるのは当然なのである。

またこの礼は対仏教としても大きな意味を持った。その象徴的な例が葬礼の問題である。古代の礼において神主(木主)の使用は上層部に限られていたが、程頤はそれを士大夫全般に拡大し、朱熹もそれを引き継ぐ。そこには儒教流の葬礼祭祀に一貫したシステムを付与し、仏教に対抗したいという願望があった。二程らが仏教の葬礼を用いない家風であることを誇るところにそれがよく現れている。ただ神主に魂気が残存していくことを言おうと、個体の魂の消滅に対する心理的恐怖の超克は解決しきれず、道学者はこの問題にも取り組むこととなるが、それは必ずしも持続しえなかつた(注4)の拙著)。

このように宋以後の礼は、郷村秩序といった社会的問題、修養次元での問題、対仏教という問題を重層的に含みこんでいるのであるが、これらの要素を単に寄せ集めるのみでなく、思想史の中で包括的に位置づけていく必要がある。また東アジア各地における礼の受容形態の多

様性は文化的社会的地域差の徴表とされてきたが、宋以後の礼が持ったこれらの多様な諸機能が東アジア各地においてそれぞれのように展開していったのかについても、改めて検証の必要があろう。

注

(1) 伊東貫之『思想としての「中国近世」』(東京大学出版会、二〇〇五)は、類書中先行研究に対する目配りのよさでは群を抜いている。本稿の欠を補う意味でも参照されたい。

(2) 島田氏の論文集は没後に相継いで刊行されている。『隠者の尊重——中国の歴史哲学』(筑摩書房、一九九七)、『中国の伝統思想』(みすず書房、二〇〇一)、『中国思想史の研究』(京都大学出版会、二〇〇二)。広い学識に基づく概説物が今でも啓発されるところが多い。

(3) 乱暴に言わせてもらえば、日本思想史研究でも、近世における丸山真男氏の朱子学的思惟の解体過程論、また中世における黒田俊雄氏の顕密体制論や権門体制論などが、島田氏の議論の位置に似ているように思える。つまり先鋭的な問題提起の書が正統的位置におさまっていることへの不安定感である。日本近世思想史研究にとって今必要なのは、丸山論を書くこともあろうが、それ以上に他の思想史の記述の可能性をさぐりそ

れを互いにつけあうことで異化しあうことや、あるいはそれぞれの意味と限界を見定めることで、次の止揚を目ざすことであろう。流行している思想史記述の物語化の否定は、ともすれば現在の問題意識をそのままなすりつけるだけに終わりがちである。時間的連続的転変を語る思想史は最初からその文脈にあわないものを捨象するのは当然であるが、その物語の無効性までも即断できようか。

(4) 土田健次郎『道学の形成』(創文社、二〇〇二)。

(5) 宋から明にかけての思想史把握は以前から各種あり、筆者はかなり前になるが三つの型に分けたことがある(拙稿「中国における宋明理学史研究」、『東洋の思想と宗教』四、一九八七)。一には「理の哲学」、「心の哲学」、「気の哲学」といった三潮流に分けるもの(山井湧『明清思想史の研究』、東京大学出版会、一九八〇、同型のものでは岡田武彦『宋明哲学序説』、文言社、一九七七年、張岱年氏など)。二には全てを朱子学の展開で捉えるもの(蒙培元氏)、三には宋学明学全体を大きな思想運動とみなすもの(李沢厚氏)。またつけ加えるとすれば、知識主義と反知識主義の交互興隆で捉えるもの(余英時氏)。これらの諸見解は今でも検討の対象であり続けているが、ただ儒学中心であり、また現今の趨勢の中では、かかる思想の型による学説史的把握がど

こまで社会史、文化史などに関連づけられるかも問われよう。

(6) 山下龍二氏の島田氏批判及び李贄観は『陽明学の終焉』(研文社、一九九二)にまとめられている。山下氏の陽明学研究の名著は『陽明学の研究』(現代情報社、一九七二)。別に唯物史観からの批判は守本順一郎や岩間一雄両氏のものがあるが、この方面は批判者側の教条性のゆえ論争の稊りがあったとは思えない。

(7) 溝口雄三『中国前近代思想の屈折と展開』(前掲)および『方法としての中国』(東京大学出版会、一九八九)。なお山井氏(注(5))のように、陽明学の心学と清朝考証学の間に経世治用の学の一項をはさむことによつて連続的段階把握を試みたものもある。

(8) 小島毅『宋学の形成と展開』(創文社、一九九九)には、唐から宋にかけて天観の変容という著者のそれ以前からの研究がまとめて叙述されている。

(9) 溝口雄三・伊東貴之・村田雄二郎『中国という視座』(平凡社、一九九五)の溝口氏執筆部分。また同氏の思想史としてかなりまとまった叙述としては、戸川芳郎・峰屋邦夫・溝口雄三『儒教史』(山川出版社、一九八七)の執筆部分。

(10) 「中国近世の主観唯心論について——万物一体の仁の思想」(『東方学報 京都』二八、一九五八、注(2)の

『中国思想史の研究』所収。

(11) 『宋明時代儒学思想の研究』(広池学園出版部、一九六二)。

(12) 岡田武彦『王陽明と明末の儒学』(明德出版社、一九七〇)。

(13) 筆者は朱子学を構成する諸概念は学者(聖人到達可能性を信じる、あるいは信じようとする者)にとって機能するものであり(「朱熹の思想における認識と判断」、『日本中国学会創立五十年記念論文集』、汲古書院、一九九八)、それゆえ構造論が優先しその後工夫論があるというよりも、工夫論の場が朱熹の思想の中心に位置すると思っている。なお垣内景子『「心」と「理」をめぐる朱熹思想構造の研究』(汲古書院、二〇〇五)は、修養者としての場から見える理と心を分析している。

(14) 荒木見悟『仏教と儒教——中国思想を形成するもの』(平楽寺書店、一九六二)。

(15) 吉田公平『陸象山と王陽明』(研文出版、一九九〇)。

(16) ただ安田氏が気をガス状の物質として捉えたのよりは、J・ニードム氏の「エネルギー＝物質」の方が説得力がある(『中国の科学と文明(思想史下)』、思索社、一九七五、原書は「Joseph Needham, *Science and Civilization in China*, London: Cambridge University Press, 1956

なお山田慶児『朱子の自然学』(岩波書店、一九七八)は、朱熹の自然観を網羅的に解説したものとして重要であるが、その気の解釈にはニードム氏の影響が感じられる。その他朱子学の気について新たに統一的説明を試みたものでは、桑子敏夫『気相の哲学』(新曜社、一九九六)。なお気を含めて筆者が行ってきた朱子学の思想分析の試みは、注(13)所引の拙稿以外に、「朱熹の思想における心の分析」(『フィロソフィア』七八、一九九一)、「朱熹理気論の再検討」(『中国の人生観・世界観』、東方書店、一九九四)、など。

(17) 朱熹の知の分析は友枝龍太郎『朱子の思想形成』(春秋社、一九六九)において分別知、悟得知に分ける型が普通であって、吾妻重一『朱子の新研究』(創文社、二〇〇四)ではその方向を再検証しつつさらに広く思想的に展開させる。

(18) 木下鉄矢『朱熹再説』(研文出版、一九九九)は原文の読み込みから朱熹の哲学を炙り出そうとした意欲作であるが、「体」字をはじめとした諸解釈、「治」から「理」への展開などの諸行論は、筆者には批評以前に理解し難い。

(19) 本稿は儒教を中心とするが、宋以後の仏教、道教、民間信仰の研究が重要なとは言うまでもない。この時期は一般に儒教隆盛と見なされることから、戦前この

方面の研究は必ずしも盛んであったとは言えないが、仏教や道教が社会に根を張った時代ということから、社会史、文化史的な関心をからめた研究が戦後目につく。特に近年筆者が注目しているのは、全真教の研究であり、全真教の通念が再考されつつある。また明末以後のキリスト教やイスラム教の漢文著作の研究（例えば柴田篤訳注『天主実義』、平凡社、二〇〇四）、特に後者は近年活性化を見せる。

(20) 「無字の周辺」（『禅文化研究所紀要』七、一九七五）、
「仏教と朱子の周辺」（同八、一九七六）。

(21) 朱熹は自己の学説の変化に極めて自覚的であったが、清朝の学者の成果を土台にそれに肉付けをしたものに、友枝氏前掲書注(17)がある。また朱熹の名著『四書集注』の改訂過程の考証では、吉原文昭『南宋学研究』（研文社、二〇〇二）。

(22) 水野氏主宰の仕事のほんの一例であるが、現行『習録』が取り入れた先行語録『遺言録』、および先行する別行語録『稽山承語』のテキスト校訂および訳注『遺言録』は、『防衛大学校紀要』七〇〜七四、八四、八六、九〇、一九九五〜七、二〇〇二・三、五、『稽山承語』は、『論叢 アジアの文化と思想』四、六、七、一九九五・七・八）。

(23) 近年の宋代史研究会の報告集の題目を見れば大方の

傾向が察せられよう。第四集『宋代の知識人——思想・制度・地域社会』（一九九三）、第五集『宋代の規範と習俗』（一九九五）、第六集『宋代社会のネットワーク』（一九九八）、第七集『宋代人の認識——相互性と日常生活』（二〇〇一）、いずれも汲古書院刊。

(24) 思想の地域化論について批判的なものとしては、陳来『儒教の地域性と普遍性』（『アジア地域文化エンハンシング研究センター報告集Ⅲ 二〇〇四年度』、早稲田大学二十一世紀COEプログラムアジア地域文化エンハンシング研究センター、二〇〇五）。

(25) 研究の基礎としてこの時代の礼の柱である『文公家礼』の文献学的研究と内容分析が要請されるが、それについては吾妻氏らが推進しその成果の一端は注(17)の著書に見える。

(26) 伊東氏前掲書注(1)では、さらに清初における礼の重視の増大を、この時代をおおむね秩序志向の展開という新たな観点から解明を試み、また溝口雄三氏は「礼教」の枠組が現代中国にまで影響しているとする（『中国の衝撃』、東京大学出版会、二〇〇四）。

(27) 牧野巽『近世中国宗族研究』（日光書院、一九四九）。

（早稲田大学教授）